実践報告

ESDの視点を導入した小学校における異文化理解学習
― 遠隔会議による国際交流を活用して ―

永　田　成　文

Developing a Unit for Cultural Understanding from the Perspective of Education for Sustainable Development in Elementary School: Utilizing Cultural Exchanges through Videoconferencing

NAGATA Shigefumi

〈Abstract〉

Foreign language pedagogical activity in elementary school is typically limited to mere classroom conversation in English. Therefore, this study aims to propose an alternative that can cultivate cultural communication skills and cross-cultural sensitivity.

In this study, the concept of 'cultural understanding' refers to the development of cross-cultural sensitivity in society, based on the practice of Education for Sustainable Development. The method used to develop cultural understanding was cultural exchanges through videoconferencing. As a result, the students obtained a positive understanding of Australian culture and were able to effectively communicate Japanese culture during the cultural exchanges.

The results reveal that the unit for cultural understanding can cultivate cross-cultural communications skills and sensitivity among students.

キーワード：小学校、総合的な学習の時間、外国語活動、ESD、遠隔会議、異文化理解

1．小学校における外国語活動の導入

国際化が進展する現代世界で人類が平和に共存していくためには、世界各国の歴史・風土・生活様式・文化・人々の生き方・考え方等の相互理解が必要である。1998年の教育課程審議会答申において、「広い視野を持って異文化を理解し、異なる文化や習慣を持った人々と偏見を持たずに自然に交流し生きていくための資質や能力の育成を図る」という、異文化理解と多文化共生の視点が重視された。1998年版の小・中学校、1999年版の高等学校の学習指導要領において総合的な学習の時間が創設され、教科等の枠を超えた横断的・総合的・探究的な学習の事例の1つとして、国際理解に関する学習活動が示された。

1998年版の小学校学習指導要領では、総合的な学習の時間の国際理解に関する学習活動について、「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは、学校の

実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること」と示された。1999年版の小学校学習指導要領解説では、体験的な学習の事例として、「歌、ゲーム、簡単な挨拶やスキット、ごっこ遊びなど音声を使った体験的な活動、作品交換や姉妹校交流などの外国の子どもたちとの交流活動、ネイティブスピーカーなどとの触れ合い」が示された。

英語活動は総合的な学習の時間を中心に約 9 割の小学校で実施されている。しかし、単なる英会話学習になっているなど総合的な学習の時間における英語活動の成果に疑問も投げかけられている（兼重・直山編、2008）。小学校で外国語会話等を行うときは、外国語に触れるばかりでなく、外国の生活や文化などに慣れ親しむ活動を積極的に取り入れていく必要がある。

2．小学校における総合的な学習の時間と外国語活動

2008 年版の小学校学習指導要領では、総合的な学習の時間について、「国際理解に関する学習を行う際には、問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、諸外国の生活や文化などを体験したり調査したりするなどの学習活動が行われるようにすること」と、外国語会話の文言がなくなり、外国の生活や文化を体験したり調査することが強調されている。これは、小学校高学年において、外国語活動の時間が創設されたことと関係している。新設された外国語活動は、外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることと、日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることの二つの内容の柱がある。また、コミュニケーション能力の素地を養うとともに、言語や文化について体験的に理解を深めることを目標としている。

総合的な学習の時間における国際理解に関する学習活動と新設された外国語活動は、コミュニケーション能力に対する考え方が異なるが、異文化理解という共通領域が存在する。そのため、両者は連携して取り組むことが可能である。具体的には、異文化理解のテーマを設定し、諸外国の児童と意見交換をするような場面を設定すれば、自らの思いを他者の心に届ける単なるコミュニケーションばかりでなく、自己と異質な他者との間を繋ぐ相互作用である異文化コミュニケーション能力[(1)]の育成が可能となる。

総合的な学習の時間における国際理解に関する学習活動では、外国語活動との連携を意識しながら、児童が異なる文化をもつ人々との交流を積極的に図ることで、異文化を理解し、尊重する態度を育成していくことが可能となる。

3．ESDの視点を導入した異文化理解学習

3．1　ESDと総合的な学習の時間

持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development: ESD）は価値や態度を育成することを目的としている。わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画（2006）では、ESDの目的、内容、方法を表1のように示している[(2)]。

表1　ESDの目的と内容と方法

目的：	知識を網羅的に得ることだけでなく,「地球的視野で考え、様々な課題を自らの問題としてとらえ、身近なところから取り組み（think globally, act locally)、持続可能な社会づくりの担い手となる」よう個々人を育成し、意識と行動を変革する。
内容：	世代間の公平、地域間の公平、男女間の平等、社会的寛容、貧困削減、環境の保全と回復、天然資源の保全、公正で平和な社会など、環境、経済、社会面の多岐にわたる課題。
方法：	「関心の喚起→理解の深化→参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促す。これらの過程では、単に知識の伝達にとどまらず体験・体感を重視して、探究や実践を重視する参加型アプローチとする。

※わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画（2006）より作成

ESDと総合的な学習の時間の目的、内容、方法を照合すると、それぞれ目的では、「持続可能な社会づくりの担い手となるように意識と行動を変革する」と「問題の解決に取り組む態度を育て、自己の生き方を考える」、内容では、「環境、経済、社会面の多岐にわたる課題」と「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題」、方法では、「参加する態度と問題解決能力の育成」と「主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成」が対応する。ESDと総合的な学習の時間の目的・内容・方法は共通する部分が多く、ESDの視点を総合的な学習の時間に導入することが可能である。

3．2　ESDの視点を導入した異文化理解学習の内容

外国語活動と連携した総合的な学習の時間の国際理解に関する学習は、異文化コミュニケーションを活用した異文化理解学習としてとらえ直すことができる。異文化を尊重する態度の育成に関わるESDの視点は、異文化に対する社会的寛容、公正で平和な社会の構築である。これらの視点の土台として多文化共生という価値観がある（図1参照）。

多文化共生の価値観を育成するために、社会的寛容の視点から人々の生活様式を理解し、公正で平和な社会の視点から人々との交流による社会的論争問題を解決していく。異文化理解学習が始まる小学校高学年では、諸外国の人々の生活様式が内容の中心となる。

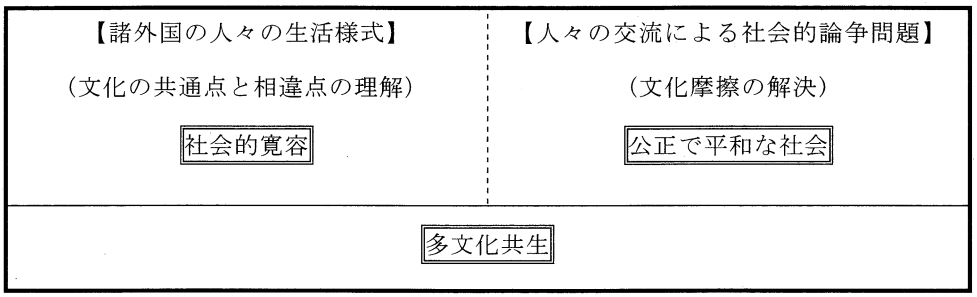


図 1　ESD の視点を導入した異文化理解学習の内容

3．3　ESD の視点を導入した異文化理解学習の方法

国際理解教育の一環としての外国語会話の目的は、多様な言語や文化を持つ人と接したときに、差別や偏見やステレオタイプをもたずに彼らと理解し合い、協力し合い、共生できる人物を育成することである（冨田、2004）。異文化に対する社会的寛容と多文化共生の価値観を育成する異文化理解学習において、ESD の参加する態度を育成する方法の一つとして、諸外国の人々との外国語会話を行うことが考えられる。具体的には、テレビ会議システム[(3)]を用いた遠隔会議による国際交流を活用する。

国際交流では 2 つの段階を設定する。まず、諸外国の自国文化の紹介や日本文化への質問を聞き、それに答えようとすることで異文化を理解する段階である。次に、事前学習による日本の文化と他国の文化との共通点や相違点を踏まえ、他国文化で疑問に思ったことを質問したり、日本文化で伝えたいことを紹介することで異文化を尊重する態度を育成する段階である（図 2 参照）。

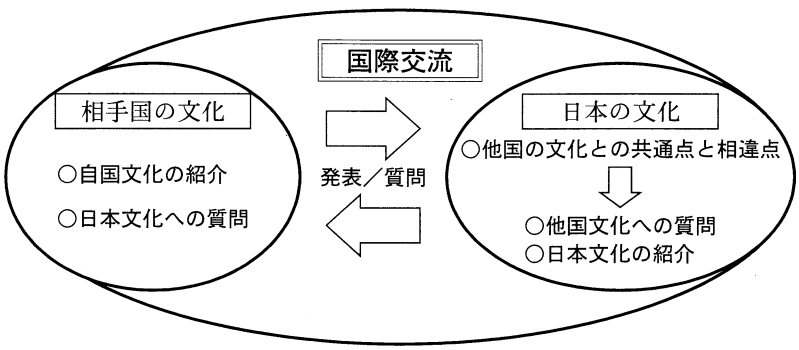


図 2　国際交流を活用した異文化理解学習の方法

お互いの文化を発表・質問し合うという国際交流により、異文化コミュニケーション能力とともに、異文化を尊重する態度を育成することができる。

4．単元「日本とオーストラリアの文化を伝え合おう」

単元「日本とオーストラリアの文化を伝え合おう」の目標と計画は次のとおりである[(4)]。

［単元目標］

積極的な異文化コミュニケーション活動によりお互いの国の文化を伝え合い、日本とオーストラリアのお互いの文化を尊重する態度を育てる。

［単元計画］

第一次	伝えたい日本文化	…2時間
第二次	日本とオーストラリアの文化	…2時間
第三次	遠隔会議による国際交流	…2時間

4．1　伝えたい日本文化

北立誠小学校の担任の指導のもとで、遠隔会議でオーストラリアの児童に伝えたい日本文化について話し合い、班分けを行った。各班で文化の伝え方やオーストラリアの児童への質問を考えた。各班が設定した文化の伝え方、関連する質問は表2のとおりである。次時以降、それぞれの班に大学生のチームがサポートとして入った[(5)]。

表2　各班のテーマと伝えたい文化と質問

1班	テーマ：百人一首〔大学生：多文化（言語・宗教）チームがサポート〕	
	○和歌を紹介したい(札の拡大コピー)	○オーストラリアも詩や短歌があるのか
2班	テーマ：運動会〔大学生：学校生活チームがサポート〕	
	○運動会の組み体操を紹介したい（写真）	○オーストラリアも組み体操があるのか
3班	テーマ：寺と城〔大学生：住居チームがサポート〕	
	○法隆寺と大阪城を紹介したい（写真／模型）	○オーストラリアも寺や城があるのか
4班	テーマ：伝統的な遊び〔大学生：社会（祭り・行事）チームがサポート〕	
	○お手玉と竹とんぼを紹介したい（実演）	○オーストラリアも伝統的な遊びがあるのか
5班	テーマ：伝統的な着物〔大学生：衣服チームがサポート〕	
	○日本の浴衣を紹介したい（試着）	○オーストラリアも浴衣があるのか
6班	テーマ：伝統的な飲み物〔大学生：食事チームがサポート〕	
	○日本の抹茶を紹介したい（実演）	○オーストラリアも抹茶を点てるのか

4．2　日本とオーストラリアの文化

6月29日（月）3限目の目標は、日本とオーストラリアの多文化（言語・宗教）、社会（祭り・行事）、衣服、食事、住居、学校生活の違いをとらえ、異文化を意識することであった。オーストラリアの文化について、三重大学の学生がチームごとに5分間で授業を行った。3限目「日本とオーストラリアの異文化を意識する」の学習過程を示したものが表3である。

表3　「日本とオーストラリアの異文化を意識する」の学習過程

学習項目	主な発問や指示	学習活動	指導上の留意点	資　料
1．日本とオーストラリアの文化（永田）	「日本とオーストラリアの文化の違いについてみていきましょう」 「大学生の先生の授業をしっかり聞きましょう」	○異文化を意識する。 ○オーストラリアの文化を学習していく構えをもつ。	○TV会議に向けて、日本とオーストラリアの文化を比較し、日本と違う文化をとらえることを伝える。 ○オーストラリアの文化である言語・宗教、祭り、食事、衣服、住居について学習することを伝える。	○5月のソニア先生来校の写真 ○世界地図 ○文化の項目6つ
2．オーストラリアの多文化（多文化チーム）	「この写真の国はどこでしょう」 「なぜ、オーストラリアにたくさんの違う文化が見られるのでしょう」	○写真から国名を予想する。 ○オーストラリアにたくさんの文化が存在する背景を考える。	○言語や宗教がたくさん存在することに気づかせる。 ○オーストラリアは移民を受け入れてきた国であることを思い出させる（5年時のTV会議のテーマ）。	○オーストラリアの中に存在する異文化の写真
3．オーストラリアの祭り（社会チーム）	「二つの祭りはどのような違いがありますか」 「なんのために行われていると思いますか」	○二つの祭りの違いを考える。 ○二つの祭りの背景を予想する。	○日本とオーストラリアの祭りの写真を見せ、違いを確認する。 ○どのような祭りであるかを確認後、祭りを行う理由を予想させる。	○津祭りとロイヤルイースターショーの写真

4．オーストラリアの衣服（衣服チーム）	「この二枚の服に違いはありますか」 「オーストラリアの衣服には私たちが夏に使うものが入っていますが、何でしょうか」	○二枚の服の違いを考える。 ○衣服に入っているものを予想する。	○視覚的にはかわらないことを確認する。 ○日焼け止めを見せ、紫外線から肌を守るために日焼け止めの効果がある衣服について説明する。	○日本とオーストラリアの夏服の写真 ○日焼け止め（実物）
5．オーストラリアの食事（食事チーム）	「これらの料理はどこの国で食べられているのでしょう」 「どうしてオーストラリアには多様な国の料理があるのか」	○写真から国を予想する。 ○なぜ多様な国の料理があるのかを予想する。	○ヒントの肉（カンガルー）を見せ、オーストラリアであると発表する。 ○夢や希望を持って世界から移り住んだ人々によって多様な料理が持ち込まれたこと、アボリジニーの料理も存在することに触れる。	○オーストラリアの料理の写真 ○アボリジニー料理の写真
6．オーストラリアの住居（住居チーム）	「日本とオーストラリアの家は同じでしょうか、違うでしょうか」 「平屋の長所と短所を考えよう」	○同じか違うかを発表する。 ○平屋の長所と短所を考える。	○国土の大きさと家について予想させ、オーストラリアは主に平屋であることをつかませる。 ○長所としてバリアフリーに触れ、老後に易しい設計であることをつかませる。	○面積の図 ○日本とオーストラリアの家の写真
7．オーストラリアの小学校生活（学校生活チーム）	「オーストラリアの小学生はどうやって学校に登校しているでしょうか」 「日本のお弁当との違いはなんでしょうか」	○日本のように徒歩かを考える。 ○日本のお弁当との違いを発表する。	○小学校から遠い児童もいるのでスクールバスがあることを説明する。 ○オーストラリアは給食がないことを思い出させ（5月のソニア	○スクールバスの写真 ○オーストラリアの弁当の写真 ○時間割表

	「この時間はなんでしょうか」	○時間割表から予想する。	先生訪問）、写真から日本のお弁当との違いを発表させる。 ○時間割表からオーストラリアにRecess（中間の休み）があることに着目させ、日本との違いを説明する。	
8．オーストラリアの異文化（永田）	「オーストラリアの文化について、日本と異なる点から質問を考えましょう」 「各班の役割と英語の基本フレーズを確認しましょう」	○担当の文化項目のオーストラリアの友達への質問を意識する。 ○役割とボードの基本フレーズを意識する。	○授業に関わる文化項目の質問と、各班で既に用意している質問をボードに表現することを伝える。 ○各班担当の文化項目を確認し、簡潔な英訳の表現を意識させる。	○各班の担当確認表 ○基本の英語フレーズ

6 月 29 日（月）4 限目の目標は、オーストラリアの多文化（言語・宗教）、社会（祭り・行事）、衣服、食事、住居、学校生活についての発表を考え、それを相手にわかりやすいようにボードに表すことであった。各班で、遠隔会議における役割を決定し、ボードづくりを行った。大学生のチームが各班に入り、児童の役割の割り振りとボードづくりをサポートした。各班における児童の役割と基本となる英語のフレーズを示したものが表 4 である。

表 5 は伝統的な着物をテーマにした 5 班の英文の例である。資料 1 は表 5 の⑥の児童が作成したボード[(6)]の例である。伝えたい衣服文化である日本の浴衣について、写真で示し、それがオーストラリアにも存在するのかを尋ねている。ボードの裏には、英文の発音の仕方や英文の意味を書いている。

遠隔会議による国際交流で活用したボードプレゼンテーションは文部科学省が示した音声を中心にした素材の選定の視点[(7)]を踏まえている。

表4　各班の児童の役割と英語の基本フレーズ

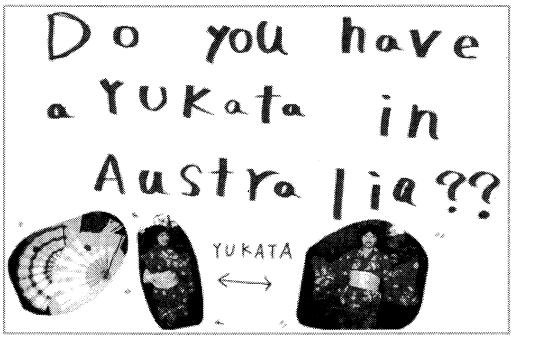
①	授業で学んだオーストラリアの紹介	In Australia, ～～～～～～.
②	授業に関する日本文化の紹介	In Japan, ～～～～～～.
③	授業で学んだオーストラリアの文化に対する質問	Why do（don't）you ～～ in Australia?
④	伝えたい日本文化の提示(現物や写真や実演等)	This is（　　）.
⑤	伝えたい日本文化の紹介	（　　）is ～～.
⑥	伝えたい日本文化に関するオーストラリアへの質問	Do you have（　　）?

※①～⑥は各班の発表の順番を示す。

表5　5班（伝統的な着物）の英文

①	Australian clothes have the ingredient of a sunscreen.
②	Japanese clothes don't take preventive measures against sunburn.
③	How do you put the ingredient of a sunscreen in clothes?.
④	This is Yukata.
⑤	Yukata is the traditional wear after a bath.
⑥	Do you have a Yukata in Australia?

資料1　伝達したい文化のボード例（5班）



4．3　遠隔会議による国際交流

7月6日（月）に北立誠小学校6年生（36名）とCoogee Public School 5年生（30名）が遠隔会議による国際交流を行った（表6参照）。大学生は担当班である児童の発表を支援した。

まず、英語の歌 "It's a small world" を1番は日本語で、2番は英語で一緒に歌うことでアイスブレーキングを行った。次に、Coogee Public Schoolが6チームに分かれ、パワーポイントを活用した英語によるプレゼンテーションを行った。写真1はグループ1のオーストラリアの食事のプレゼンテーションの様子である。左下にPolycomのカメラがあり、メイン画面であるスクリーンにお互いの映像(左がオーストラリア側、右が日本側）、サブ画面の大型テレビにパワーポイント資料が映っている。北立誠小学校の児童は、映像資料を頼りに、英語でのプレゼンテーションを理解しようと努力していた。

次に、北立誠小学校が 6 チームに分かれ、ボードを活用した簡単な英語によるプレゼンテーションを行った。児童はボード作成後の 1 週間に発音の練習に主体的に取り組み、自分の担当する文化についてわかりやすく伝えようと努力していた。写真 2 は 4 班の日豪の祭りについて、ボードを用いて日本では祭りに伝統的な踊りがあることを伝えている様子である。児童は Polycom のカメラに向かって説明している。Coogee Public School の児童はボードの英文や絵や写真を参考に、プレゼンテーションを聞き取ろうと努力していた。写真 3 は 3 班の日本の寺と城について、寺の写真を使って説明している様子である。城の説明では模型を使うなど英語での説明を補足しようと努力していた。写真 4 は 6 班の日本の茶道について、実際にお茶を点てている様子である。実演することで抹茶の点て方をわかりやすく伝えようとしていた。Coogee Public School の児童は、特に抹茶を点てて飲む日本の食文化の様子に見入っていた。

表 6　日本とオーストラリアとの遠隔会議による国際交流の流れ

1.11:00-11:05：あいさつ、両国児童の歌	
“It’s a small world”（1 番日本語、2 番英語）	
2.11:05 -11:30：Coogee Public School の発表	
グループ 1：オーストラリアの食事 グループ 2：オーストラリアの祭り グループ 3：オーストラリアの住居 グループ 4：オーストラリアの衣服 グループ 5：オーストラリアの宗教 グループ 6：オーストラリアの言語	質問：Which Australian foods are popular in Japan? 質問：What are the main religions in Japan? 質問：What type of houses do you have? 質問：What is your traditional clothing? 質問：What are the main religions in Japan? 質問：What are the main languages spoken in Japan other than Japanese?
3.11:30 -11:55：北立誠小学校の発表	
1 班：日豪の言語・宗教、日本の和歌（百人一首） 2 班：日豪の学校生活、日本の運動会（組み体操） 3 班：日豪の住居、日本の寺と城 4 班：日豪の祭り・行事、日本の昔からの遊び 5 班：日豪の衣服、日本の浴衣 6 班：日豪の食事、日本の茶道（抹茶）	質問:Do you have Hyakunin-Issyu in Australia? 質問:Do you have cheerleadings in Australia? 質問:Do you have temples in Australia? 質問:Do you have traditional toys in Australia? 質問:Do you have a Yukata in Australia? 質問:Do you have tea ceremony in Australia?
4.11:55-12:00：あいさつ	
遠隔会議による国際交流へのコメント	

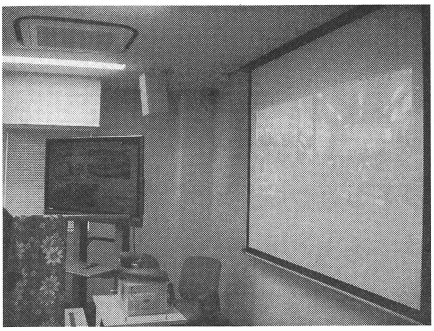


写真1　Coogee Public Schoolの様子

写真2　北立誠小学校の様子

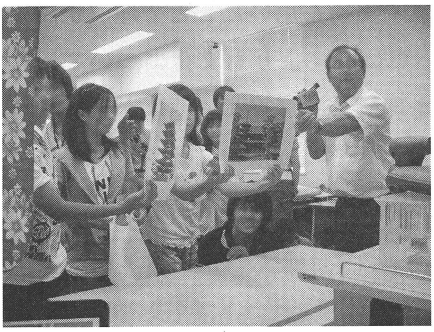


写真3　3班の写真（寺）のプレゼン

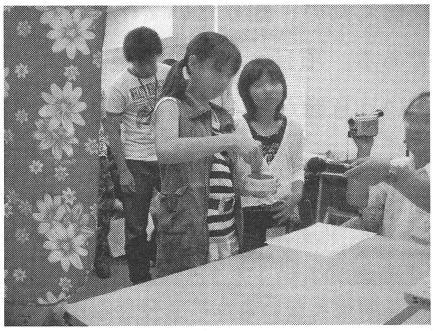


写真4　6班の実演（抹茶）のプレゼン

5．遠隔会議による国際交流の成果と課題

遠隔会議による国際交流の直後、児童にアンケートを実施した（6学年36名）。選択式アンケートとして次の項目について、それぞれ、a. 強く（とても）＝4ポイント、b. 少し＝3ポイント、c. あまり＝2ポイント、d. まったく＝1ポイントを選択させた。

1. 外国の小学生と話す時、英語のまちがいが気になった。
2. 外国の小学生と話し、英語の勉強をもっとしたいと思った。
3. 外国の小学生と話し、もっと話したいと思った。
4. 外国の小学生と話し、相手が話す内容がわかりましたか。
5. 外国の小学生と話し、外国の文化についてわかりましたか。
6. 外国の小学生と話し、外国の文化について考えましたか。
7. 外国の小学生と話し、話す力が高まると思いますか。
8. もう一度外国の小学生と文化について話し合いたいですか。

アンケートの結果（36 名の平均）は次のようになった。

	1	2	3	4	5	6	7	8
分野	伝達	英語	交流	理解	理解	思考	伝達	交流
平均	2.3	2.9	2.9	2.3	3.0	2.7	2.9	3.1

項目 1 の結果（2.3）から、英語によるコミュニケーションに関して、臆していないことがわかる。項目 4 と 5 の結果（2.3、3.0）から、英語の聞き取りそのものは難しかったが、文化については理解ができている。これは、日本とオーストラリアのチーム分けやお互いに伝えたい、知りたい文化がほぼ共通し、写真や実物を用いたことで理解が深まったためである。項目 3 と 8 の結果（2.9、3.1）から、単に話すよりも文化について伝え合いたいという意識が読みとれる。以上から、異文化を理解し、尊重する態度が育成されたといえる。

記述式アンケートも実施した。その項目と結果は次のようになった。

9. テレビ会議に向けてどんなことをがんばりましたか？（数字は延べ人数を示す）	
○英語を間違えないように（発音の）練習：12 ○資料の準備（法隆寺、浴衣、ジャムなど）：7 ○お手玉の練習：2 ○簡単な英語に表現：2	○（英語の）ボードづくり：11 ○実演の準備（竹とんぼ,抹茶）：2 ○声の大きさに気をつけて練習：2
10. テレビ会議（本番）でどんなことをがんばりましたか？（数字は延べ人数を示す）	
○大きい声で話す：9 ○英語を間違えないように話す：9 ○実物、実演する（浴衣を着る、お茶を点てる）：2	○ゆっくり（はっきり）と話す：9 ○英語の発音：5 ○相手の言っていることを聞き取る：2

項目 9 の結果から、準備段階では英語を間違えないように発音に気をつけて話すことや、日本の文化を相手にわかりやすく伝えるために、ボードづくりや画像や実演などの異文化コミュニケーションに注意を払い、積極的に準備していたことがわかる。項目 10 の結果から、遠隔会議では相手にわかりやすく伝えようと大きい声でゆっくりと話すこと、相手に正確に伝えるというコミュニケーションのそのもののあり方に児童の意識が向いていることがわかる。

単元「日本とオーストラリアの文化を伝え合おう」では、ESD の異文化に対する社会的寛容の視点を導入した。相手国に伝えたい日本の文化を考え、相手国の異文化について調べた上で、遠隔会議による国際交流を活用して、相手国の伝達したい文化を聞き、自国の伝達したい文化を伝え、お互いの文化を質問し合った。

成果として、児童は日本の文化を相手にわかりやすく伝え、相手の発表を聞き取ろうと

し、お互いの文化に対する認識が深まり、国際交流に対する意欲が高まった。異文化コミュニケーション能力とともに異文化を尊重する態度を育成することができたといえる。

課題として、児童は遠隔会議による国際交流の場面ではコミュニケーションのあり方に気をとられすぎて、文化に対する思考があまりなされていなかった。異文化コミュニケーションによりお互いの文化の背景を考えることで異文化を尊重し、より多文化共生の価値観につながるような設定を再考することが必要である。

【付記】

本稿は、平成20－22年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「大学教育における遠隔会議を活用した連携型の国際理解学習の教材開発」（研究代表者　永田成文）の成果報告の一部である。

【註】

(1) 鳥飼（2004）の異文化コミュニケーションの定義である。

(2) 国連持続可能な開発のための教育の10年（United Nations Decade of Education for Sustainable Development: UNDESD）の国際実施計画（2005）をもとにした日本の計画である。

(3) 1998年の教育課程審議会答申は、国際理解を深める具体的な方策として、テレビ会議システムによる遠隔授業の活用を提言した。Polycomが代表的な機材であり、テレビ電話と比較して、画像が鮮明で、音声のタイムラグが小さく、クラス規模の交流が可能である。しかし、設備投資が必要なため、教育現場における活用はあまり進んでいない。

(4) 外国語活動と連携した総合的な学習の時間の一貫として、2009年の6月下旬から7月上旬にかけて、津市立北立誠小学校の第6学年（36名）で実施した。児童は2009年の3月に移民をテーマとして、今回と同じ、シドニー郊外のCoogee Public School第5学年（30名）との遠隔会議による国際交流を経験している。また、2009年の5月に、北立誠小学校にてシドニー大学のソニア先生によるオーストラリアの自然についての授業（1時間）を受けている。遠隔会議による国際交流は三重大学の遠隔授業室（Polycom設置）で行った。

(5) 2009年前期に三重大学で小学校免許取得に必要な「社会教材研究」を受講している学生（23名）である。講義の中でオーストラリアのシドニー大学のソニア先生からオーストラリアの文化についての遠隔講義を受けている。学生の興味のある文化のテーマごとに6チーム（言語・宗教、祭り・行事、衣服、食事、住居、学校生活）を編成した。6月29日のボードづくりの英語化や7月6日の遠隔会議の場面では、英語科の有志学生（6名）にもサポートをお願いした。

(6) ボードの表に英語とイラスト（図や写真）、裏に読み方を記すように指導した。

(7) 文部科学省（2001）では、①音声を中心とする、②子どもの「いいたいこと」「したいこと」を扱う、③子どもの日常生活に身近なことがらを扱う、④基本的で、応用のきく表現を選ぶ、⑤既知のものでも新たな発見をもたらす話題等を扱う、⑥外国人の表現や身振りの中から、文化の違いに気づかせる、⑦子どもの発達段階を踏まえた話題・素材・題材を扱うが示された。

【参考文献】

兼重昇・直山木綿子編（2008）『小学校新学習指導要領の展開　外国語活動編』明治図書、p.15

国連持続可能な開発のための教育の 10 年関係省庁連絡会議編（2006）『わが国における「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」実施計画』、pp.3-7

冨田祐一（2004）「国際理解教育の一環としての外国語会話肯定論－競争原理から共生原理へ－」大津由紀夫編『小学校での英語教育は必要か』慶応義塾大学出版会、p.172

鳥飼玖美子（2004）「小学校英語教育－異文化コミュニケーションの視点から－」大津由紀夫編『小学校での英語教育は必要か』慶応義塾大学出版会、p.187

文部科学省（2001）『小学校英語活動実践の手引き』開隆堂出版、pp.5-6